第十三回 福原徹 演奏会

徹の笛

2023年 6月29日（木）7時開演［6時30分開場］ 国立劇場 小劇場

主催＝「徹の笛」実行委員会　後援＝公益財団法人日本伝統文化振興財団 JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION／㈲邦楽ジャーナル／邦楽の友社

ごあいさつ

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

2001年から昨年まで12回開催してきた「徹の笛」ですが、国立劇場で開催するのは今回が初めてです。

改めて申すまでもなく、多くの邦楽界の人たちにとって、ここは格別の「場所」であると思います。

師匠の笛を初めてナマで聞いたのもここ。師匠が「笛の会」と称した意欲的なリサイタルを長年継続されていたのもここ。そして自分の初舞台もここで、その後、師匠のお供、さらに演奏会、舞踊会等々ここの舞台で、袖で、楽屋で、客席で…たくさんの勉強や経験をさせていただいた場所であり、また、ここに来ればいつでも誰かに会えるというような場所でもありました。

その国立劇場が建て替えのためしばらく休館するとのことで、現・国立劇場での最初で最後の「徹の笛」となりました。

今回は古典3曲、自作2曲。

昨年文化勲章を受章された山勢松韻先生はじめ、豪華な御助演の皆様をお迎えすることができました。共演者のみならず、スタッフ・関係者の皆様にも多くの時間をお付き合いいただいたことに感謝申し上げます。

お忙しい中、また何かと落ち着かない状況の中、ご来場いただきました皆様方に、あらためて厚く御礼申し上げます。
ありがとうございました。

福原 徹

長唄めりやす
もみぢ葉

- ●長唄　東音味見純
- ●三味線　東音瀬川靖代、東音松浦奈々恵
- ●笛　福原 徹

福原 徹 作曲
さあらば鈴を参らせう

- ●笛　福原 徹

常磐津
薪荷雪間の市川 ―山廻り―

- ●浄瑠璃　常磐津兼太夫、常磐津菊美太夫、常磐津千寿太夫
- ●三味線　常磐津文字兵衛、岸澤式松
- ●上調子　常磐津紫十郎
- ●笛　福原 徹
- ●蔭囃子　福原百之助、福原鶴之助、福原貴三郎、福原遊馬

―――――休憩―――――

福原 徹 作曲
五調七管［初演］

Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ

- ●笛　福原 徹、福原寛瑞、福原寛乃
  藤舎優夏、藤森彩貴、迎田優香、北川潤子
- ●囃子　福原百之助、堅田喜三郎
  望月左太助、藤舎雪丸、福原遊馬

―――――休憩―――――

箏曲
初音曲

- ●箏　山勢松韻
- ●笛　福原 徹

もみぢ葉

初世杵屋新右衛門作曲「高尾さんげ」（初演1744年市村座）の一部を、めりやすとして扱っているもの。

笛を始めて半年後、この国立劇場で師匠主催のお浚い会「福原会」が開かれた。その二か月くらい前（私はまだ3回程しかお稽古を受けていなかった）、たまたま師匠やお弟子さん方と喫茶店に寄る機会があり、自然とその福原会の話題になった。私はまだそんな会に出ることなど思いも寄らなかったのだが、一人のお弟子さんから「君は何を吹くの？」と尋ねられ、なぜか「吹くんだったら「高尾さんげ（もみぢ葉）が吹きたいです」と答えてしまっていた。笛を始めたばかりの高校生が、なぜ「もみぢ葉」なのか？ 自分でもその理由を思い出せない。師匠も驚いたと思うのだが、「あぁ、もみぢ葉ね、いいね」みたいな感じで、その場で「もみぢ葉」で出ることが決まってしまった。それで私の初舞台は、国立劇場で「もみぢ葉」となった。

その時に共演して下さった方々は、もうこの世には居ない。今回はいま藝大で常勤教員として後進の指導に当たられている味見氏、瀬川氏にお願いした。

さあらば鈴を参らせう

2021年12月「創邦21 第18回作品演奏会」（紀尾井小ホール）にて初演。

ホンホヒトウロ。

三番叟「鈴の段」の唱歌（しょうが）。初めて知った時、なんとも神秘的な印象を受けた。まぁ、初めて触れる笛の唱歌はどれも不思議な呪文のように聞こえるものだが、それにしても。

ホンホヒトウロ。

だいぶ慣れてきたとは言え、やはりこれは格別。なにやら呪術的にも思われるが、もちろん躍動感があり、確かな力強さ、安定感、そしておおらかさも感じられる。

ホンホヒトウロ。

今こそ。

（初演時のプログラムより）

薪荷雪間の市川 ―山廻り―
（たきぎおうゆきま　いちかわ　やまめぐ）

三升屋二三治作詞、五世岸澤式佐作曲。初演1848年河原崎座。新山姥、市川山姥とも呼ばれる。この作品の眼目である、山姥の四季の山廻りの部分を抜き出して、「山姥」と題し舞踊会でもよく上演されている。今回もその形で演奏する。

舞踊会で笛のお手伝いを少しさせていただけるようになった頃から、この曲に惹かれ続けている。特に笛が活躍するという曲ではないし、ことさら笛の面白いところがあるわけでもない。しかし、この曲を吹く時はいつも気持ちが高まるような気がする。いずれにせよ、名曲であることは間違いないと思う。

通常は蔭で吹いているのだが、今日は笛だけ出囃子とさせていただく。

学生時代から親しくさせていただいている文字兵衛氏、兼太夫氏ご兄弟に共演をお願いした。

五調七管［初演］

伝統芸能の世界では、笛は囃子の一員である。いつも鼓や太鼓などと一緒に演奏している。笛方どうしよりも、囃子方と過ごす時間のほうが圧倒的に長い。笛方は囃子（打楽器）の音を聴き、タイミングを計り、それに乗ったり時には駆け引きしたりする。あるいは、囃子をちょっと俯瞰しているというか、少し斜めから眺めているような時もあるかも知れない。

笛方が、囃子の手も創る作品。

昨年「二調一管」という作品を発表したが、今回は「五調七管」。三章構成。

2018年4月～2022年3月藝大で教えていた時に笛専攻で在籍していた6名の若手笛方と、二十代～四十代の強者精鋭囃子方と共に。

初音曲
（はつねのきょく）

山田検校斗養一（1757～1817）作曲。山田検校唯一の組歌。源氏物語の「初音」から取材したもので、作詞は横田袋翁とも伝えられる。従来の箏組歌と同様に六歌から成り、組歌の基本を踏襲しつつも、新たな工夫が顕著で山田検校の非凡な才能が強く感じられる。

一年半ほど前になるが、山勢先生の独奏で「初音曲」を聴く機会があった。その時、不覚にも涙がこぼれそうになってしまった。そして、亡き師匠がここに笛を入れたらさぞかし素晴らしいアンサンブルになるだろうなぁ… とあり得ないことを想像した。自分で吹こうとは思わなかったが、いつか、あと20年くらいしたら吹けるようになるかもしれない、などと夢見ているうちに月日が過ぎて行った。

今回の国立劇場での「徹の笛」開催が決まり、突然その夢が脳裏によみがえってきた。師匠のように吹けるはずもないが、逃げずに取り組みたいと思う。

快くお引き受けいただいた山勢先生には、ただただ感謝の言葉しかありません。

［福原 徹］

©大窪道治

福原 徹

（ふくはら とおる／邦楽囃子笛方）

1961年東京生まれ。六世福原百之助（四世寶山左衛門・人間国宝）に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。
邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊・歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で、篠笛・能管の古典演奏活動を続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。
2001年「徹の笛 第一回福原徹演奏会」（津田ホール）で平成13年度文化庁芸術祭大賞（音楽部門）を受賞。以後「徹の笛」を、紀尾井ホール、紀尾井小ホール、銀座王子ホール、東京文化会館小ホールにおいて第12回まで開催。
東京藝術大学、洗足学園音楽大学、清泉女子大学、立命館大学などの非常勤講師を歴任。
NHK文化センター（青山、浜松、名古屋、柏）講師。東京、浜松、彦根などで指導にあたり、「百笛会」を主宰。
一般社団法人長唄協会会員。創邦21同人。大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。
文部科学省検定 中学校音楽教科書「中学器楽 音楽のおくりもの」（教育出版）著者。
CD：「徹」「徹の笛」「lift off」ほか。

福原徹公式サイト https://fukuharatoru.jp/

●舞台監督：飯坂信広　●照明デザイン：北寄﨑 嵩
●舞台技術：国立劇場舞台技術部　●大道具：歌舞伎座舞台　●照明・音響：パシフィック・アート・センター
●制作：伊藤裕子／高橋文乃／波田野和廣／シーエイティプロデュース
●記録：ビデオフォトサイトウ　●グラフィック：長田 彰
●協力：加藤繁治
●主催：「徹の笛」実行委員会